

## 教会カウンセリングの聖書的基礎

——日本の現状下での一考察——

小 助 川 次 雄

### はじめに

今日、教会におけるカウンセリングの実践は、わが国の福音主義者によっても、ようやく意識的に取り上げられるようになってきたと思われる。「意識的に取り上げる」というとき、積極的・肯定的な取り上げ方も、消極的・否定的な取り上げ方もあることを含んでいる。また、極めて単純に採用されているかと思えば、懐疑的に複雑にして否定されてもいる。

本論文の目的は教会におけるカウンセリングについての、正しい理解と適用を探求するための一つの試みとすることである。そして、ここで言う「正しい」とは、聖書の教えと示唆に合致するということを意味している。また、「一つの試み」というのは、このような論題を、この限られた小論文では、あまり多くの面から、論じることが不可能だからである。

以下、いくつかの前提のもとに、考察を進めてみたい。

### 一、聖書における「カウンセラー」および「カウンセル」の用語

「教会カウンセリング」というとき、多くの場合、何か特別に新しい牧会法のように考えられ、保守的立場からは、批判的とされてきた。しかし、「カウンセリング」(今は相談や助言としておく)そのものは、決して事新しいものではない。

以下、まず、聖書に見られる「カウンセラー」、および「カウンセル」という用語の頻繁に用いられている事実を取り上げてみることにする(用語の問題上、英訳聖書による。AV、RSV、NASV)①。

(一)まず「カウンセラー」を見てみよう。

①旧約聖書の中から引用してみると、つぎのように多くの書にわたってこの語は用いられている。

サムエルⅡ一五・一二(ダビデの議官)、歴代Ⅰ二七・三三、三三(ヨナタンは議官であり、英知の人で)のほか、同様に「王の参議」を「カウンセラー」として用いるところがエズラ七・二八、八・二五、イザヤ一・二六、三・三、一九・一一とある。

また、新改訳聖書では、大体「議官」に統一されているようであるが、協会訳では「議士」としてあるところが、歴代Ⅰ二六・一四(思慮深いゼカリヤについて)、ヨブ記一二・一七(神の知恵の優越の比較に関連して)、イザヤ九・六(メシヤの卓越性に関連して)などで「カウンセラー」が用いられている。ただし、最後のイザヤ九・六は、新改訳では「不思議な助言者」となっている。

さらに協会訳では「参議」とか「大臣」と訳し、新改訳では「参議官」とか「顧問」と訳している箇所もかなりある。ダニエル三・二、三、三・二四、二七、四・三六、六・七、ヨブ三・一四。

以上における旧約の用語の本来の意味は、「忠告する、謀る」であると言われる。

②他方、新約聖書においては、改訂標準訳(RSV)では、ヨハネ一四・一六、三六、一五・二六、一六・七に聖霊をさす言葉として「カウンセラー」が用いられている。なお、欽定訳(AV)では「カムファター」(慰め主)、新アメリカ標準訳(NASV)では「ヘルパー」(助け主)と訳されている。ギリシヤ語では「バラクレートス」で、「援助のためにそばに呼ばれた者、とりなしてくる人」を意味している聖霊をさす。またローマ一・三四では「だれが神の相談役(カウンセラー)になったか」とNASVは訳している。

このように、たとえば英訳聖書においても直接「カウンセラー」という語を用いていないにしても、それに類似している「ヘルパー」「カムファター」なども考え合わせると、この語の意味は、聖書の中で実に多く用いられていることがわかる。

(二)さて、つぎに「カウンセル」(忠告、助言、はかりごとなど)という語が、どのように用いられているかを概観してみたいと思う。

NASVでは、つぎの箇所で見られている。詩篇一・一(はかりごと)、三三・一一(はかりごと)、七三・二四(ざとし)、箴言二三・一〇(勸告)、一九・二〇(忠告)、ヨハネ二・一〇(相談した)などのほか、イザヤ二八・二九、エペソ一・一一、出エジプト一八・一九、士師九・三〇、Ⅰ列王二二・六、Ⅱ歴代一〇・九、エズラ四・五、

詩篇三二・八、六二・四、マタイ二二・一五、ルカ一四・三一に出て来ている。その意味するところも、助言、相談、忠告などであって、今日の意味と大差があるわけではない。

以上の聖句をあげることによって、次のことが明らかである。第一に、「カウンセラー」や「カウンセル」という用語は、何も現代的な、新しい用語なのではないこと、第二に、用語があったと同時に、通常の意味での「カウンセリング」そのものは、極めて古いものであって、また、よく言われるように、人間の歴史と同様に古いものだということさえが再確認されるのである。「カウンセリング」は神の民の中においても、全く当然の人間関係であった。王は、公的にも私的にも「カウンセラー」を持っており、法廷においても、「弁護人」(カウンセラー)が認められ、また、神に立てられた人々は信者のカウンセラーとしても活躍したのである。

特に興味深いことは、新約聖書では、聖霊が、カウンセラーと呼ばれていることである(ヨハネ一四・一六ほか)。このことは、キリスト教カウンセリングの理解にとって、極めて示唆に富んだ、重要なものであることを心に留めておきたい。詳しくは、後で検討することにする。

## 二、現代的意味のカウンセリングの原理と背景<sup>⑧</sup>

先にも触れたように、ごく通常的な意味での「相談、助言」の人間関係というものは、人類の歴史と同じくらい古いものである。もとより、そのような歴史も本稿で取り上げるには過分なテーマである。従って、ここでは、今日「カウンセリング」と言われるときに、その意味するものが、どのような経過をたどったかを概略するにとどめざるを得ないが、それも本論文の目的上必要と思われる範囲に限る。

(一)「カウンセル」という語が、今日の意味で用いられ始めたのは、一般には、一九三九年に、E・G・ウィリアムソンが『How to Counsel Students』を著わしたのによると認められている。彼は、この中で、カウンセリングの型として次の四つをあげている。

- (1) グループ・ワーク (Group Work)
- (2) 教科教師による助言 (Advisory)
- (3) 授業形態のカウンセリング (Instructional Counseling)
- (4) 臨床的カウンセリング (Clinical Counseling)

彼は、この最後の臨床的カウンセリングは専門家の手によるものと考えた。しかし、このような専門的カウンセリングが認められるようになるまでに、三つの先駆的運動があったことも認められている。それは、職業指導運動、教育測定運動、および精神衛生運動である。

(二) 右のような「臨床的カウンセリング」に加えて、新展開をもたらしたのは、有名なC・R・ロジャースの「心理療法的カウンセリング」である。一九四二年に『カウンセリングと心理療法』(Counseling and Psychotherapy)を著わしてから、いわゆる「非指示的カウンセリング、クライアント中心的カウンセリング」として知られているカウンセリングが盛んになってきた。

(三) 今日、専門的に言えばカウンセリングには、いろいろな立場がある。そして、それらは、カウンセリングの理論と技術にかかわっている重大な問題なのである。従って、あまり軽率な総括は望ましくないのであるが、あえて言え

ば、定義上から二つの立場に大別される。

(1) 狭義の定義——この立場では、カウンセリングを心理療法とほとんど同一のもの、あるいはその一つの方法とみなす。代表は前述のように、ロジャースであり、W・U・スナイダー、F・C・ソーン、F・S・ホーデンなどがあげられている。この立場では、正常な人々の問題についてのカウンセリングは除外され、感情的水準の問題だけが対象となると言われる。

(2) 広義の立場——この立場は、職業相談、教育相談のような認知的水準の問題を含めるもので、情報や解釈を与えることが主要な内容となる。E・G・ウィリアムソンをはじめ、C・G・レン、F・P・ロビンソンなどが代表としてあげられている。立場の特色を一言に言えば、「すべての人の、すべての問題」に相談、助言を与えることである。

(3) この両方の立場は、それぞれにおいて目標、過程および方法を持っており、共通している点もあれば、異なる点もある。共通点はつぎの諸点である。カウンセリングは、①人対人の関係であること、②言葉を手段とし、ダイナミックな相互作用(参加)であること、③専門家による助力―忠告や助言だけでなく、クライエントの洞察や情緒的な解消であること。④従って、カウンセラーには、専門家としての態度、知識、技術を要求されるということである。

(四) さらに、カウンセリングは、カウンセラーとクライエント(来談者)との関係のあり方によって見れば、指示的カウンセリングを非指示的カウンセリング、それに、両者の間を行く折衷的カウンセリングに分けられる。

(1) 指示的カウンセリング(Directive Counseling)という用語は、一九四二年、ロジャースが自分の新しい体系を提唱したときに、それまでの伝統的な方法に付した呼称であることに端を発したものである。従って、ロジャースの、

非指示的カウンセリング(Non-directive Counseling)以外のすべてのものを含むことにさえる。ウィリアムソンによれば、この方法では、問題の解釈を与えること、情報暗示、訓戒、激励、批評、緩和、賞讃、忠告などの技術を用いるもので、クライエントは、受動的に指示を受けてそれに従うようにするのである。そして、最も一般的に行なわれている方法である。

(2) これに対して、非指示的カウンセリングは、その思想的背景をば、フロイトとその流れの精神分析、ランクラの意志療法、アレンらの関係療法などに負いながら生み出されたものとみられている。

ロジャースによれば、非指示的カウンセリングには診断などはなく、その過程は十二の段階に帰結する。①個人が助力を求めてやってくる。②助力を与えるという関係がはつきり示される。③クライエントの感情を自由に表現させる。④カウンセラーは、クライエントによって表現された否定的感情を受容し、認め、またはそれを明らかにしてやる。⑤この否定的な感情が十分に表現されると一時的ながらも、かすかな肯定的感情が表現され、これが成長への踏石となる。⑥④と全く同じ態度で、この肯定的感情を認め、受容する(是認や賞讃ではない)。⑦この洞察、自己理解、自己受容は全過程において、二番目に重要である。⑧この洞察と相前後して、どう決心したらよいか、どの方向に進むべきか、クライエントが分かってくる。⑨ここに、この方法の最も重要な場面が展開されてくる。すなわち、わずかではあるが、きわめて重大な積極的行動がはじまってくるのである。⑩ここまできると、あとの段階は、ただもつと成長するということにつぎる。まず第一に、洞察の拡大深化、⑪クライエントにもつと積極的な、統一ある行動があらわれてくる。⑫助力の必要がだんだん感じられなくなり、カウンセリングの関係を終結しようという気持ちになる。

このようなカウンセリングの過程を取る理論的背景は、つぎの五つを主要なものとしている。①人間には、内在的

に成長の原理というものがある。自己実現 (Self-actualization) はその典型的なものとする。②クライエント中心であること。③診断を排除する。④パーソナリティ理論の中で、特に「自己概念」を重視する。この観点から、適応、不適応を取り扱って解決しようとする。この際、パーソナリティの変容ということが、いわば中心的課題なのである。

(3) 折衷的カウンセリングは、カウンセラーとクライエント相互の協力関係を強調している。根本的な考え方には、非指示的立場を受容しているけれども、診断を排せず、指示的、積極的な方法の価値を認めようとするものである。この立場の、非指示的理論と異なる点は、次のように要約される。①指示か非指示かではなく、クライエントの問題にいかにして最も効果的な助力を与えるかを第一とする。②人の理解は、人間を生物学的・社会的・心理学的側面からアプローチして初めて十分となる。従って、事例史を重視する。③カウンセラーとクライエントは、「チームのような関係」であるとみる。④問題解決における協力関係という理解。

おそらく、今日、多くの臨床の場で行なわれているカウンセリングは、実際的には折衷的方法にならざるを得なくなっていると考えられる。

(四) さて、以上のほかに精神分析的カウンセリングがあり、さらに、他の心理学的立場からもそれぞれ、その理論にもとづいたカウンセリング理論を提唱されている。たとえば、新行動主義は、学習理論によってカウンセリングを實踐しようとする。フランクルのロゴセラピーは実存分析を行なうのである。

### 三、教会カウンセリングの聖書的システム

以上述べてきたところは、第一に、聖書に見られる当時の「カウンセリング」が、公的に、あるいは個人的に、また制度的に、あるいは非制度的な形式において行なわれていた事実の指摘であり、第二に、今日の意味でのカウンセリングとは、いかなるものであるか、その基本的な内容を見ることであった。

そこで第三に問題になるのは、一体、この両者が、いかなる関連において、あるいは、非関連において、今日の意味における「教会カウンセリング」なるものを可能にさせるかということである。

この二つの事実に橋をかけて、今日の教会カウンセリングを導入するものは、「歴史」であると言えよう。

(一) そこで考えられなければならないのは、教会制度の中での教会相談実践の歴史である。しかし、このような歴史的研究だけでも、十分になそうとするならば、本稿の範囲を越えるものである。また文献的にも未だに多くの資料はないので今後にゆずらねばならない。ただし、少なくとも次の諸点は認められるところである。

一つは、初代教会における教会相談の実践の事実である。オーツによれば、ジョン・クリソストムは、「祭司論」や「悔悛について」などの牧会者論を書き、ミリアンのアンブローズは、「牧師の職務に関する三章」とでもいふべき論文を残している。<sup>④</sup>

オルセンも次のように述べている。「……、このような(聖書的意味での)教会相談は、新約時代の教会において行なわれていた。教会史の記録には、はじめの三世紀を通じて教会相談が同じように実行されたことは明らかである

としるされている。……この教会相談の概念が、のちになって、一面的な心靈論的考え方のために後退をよぎなくされたことは事実である。……」<sup>⑤</sup>

二つは、ローマ・カトリック教会における、信徒の「告悔」に対する司祭の聴聞の制度は、実質的には信徒に対する教会相談的役割をも果してきたと考えられる。

三つは、プロテスタント教会においても、教会配慮の重視は、ルター自身から始まっていると言える。オーツによれば、ルターの「靈的助言の手紙」は、結婚や性に関する問題まで言及しているし、バックマンは、「教会カウンセラーとしてのルター」を論じている。<sup>⑥</sup>

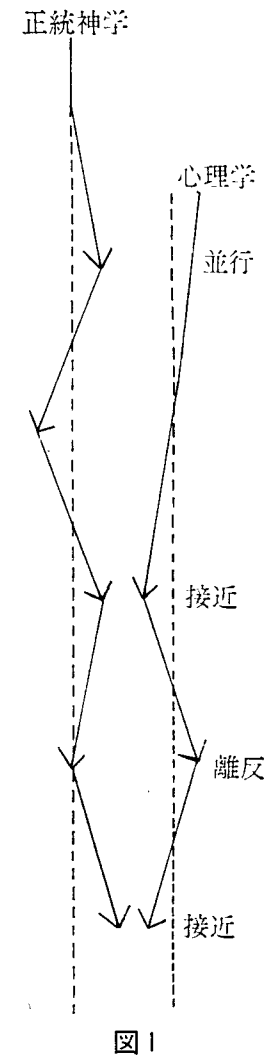
(一)ところが、十九世紀の末から二十世紀初頭にかけて、宗教心理学——といっても、ほとんどキリスト教に関するものであった——が、急速に発達し始めたことによって、聖職者のカウンセリングに、多くの影響を与えるようになったのである。

ジョンサン・エドワーズをはじめ、スタンレー・ホールによる『回心の研究』、スターバックの『宗教の心理学』(一八九九)、コーの『精神的な生活』(一九〇〇)、ウィリアム・ジェームズの『宗教経験の諸相』(一九〇二)と続き、エームス、ストラットン、ジェームス・リュウバ、プラットなどの、いわゆる宗教意識と体験の現象記述的方法による心理的研究が盛んになり、教会に多大の影響を与えたのである。

しかも時を同じくして、ヨーロッパでも精神医学的方法による宗教心理学が急速に注目されるようになった。フロイトやユングの精神分析的理解や、フランスのシャルコ、ピネル、ドラクロアなどの精神病理的研究が、非常な勢いを占めた。<sup>⑦</sup>

そして、キリスト教教育も、次第に純粹な聖書教育によるよりも、いろいろな学者の意見や思想によってなされるようになって行った。もとより、人間理解のために有益なものが少なくなかったわけであるが、自然主義的考えを基礎にしているため、聖書の直接的教えと相入れないものが多くなった。このような時流に対して、教会はその正統性を維持するためにもモダニズムを批判する者と、ファンダメンタリズムを批判する者とに分かれるようになったわけである。

この間の事情は、次のように図式化して考えることができると思う。



正統的神学と一般の学問、特に人間科学の關係は、接近、並行、離反のサイクルを、あるときは、順不同に繰り返してきていると言える。もとより、このような単純な概念化や図式化では、両者の關係のすべてを含むことはできないが、少なくとも、今日見られる、教会カウンセリングに対する受容と拒否の反応について考えるとき、その背景の一端を理解させると言うことはできる。

そして、このようなサイクルの展開は、それなりの理由と原因があった。その一つは教会が教理論争に主たる強調

をおくときは、一般的にセキユラーなものと離反しようとし、人々の魂と問題の実際を主たる関心とするときは、その解決や処理のためにあらゆる方法を考えるため、接近しようとして試みてきたように思われる。理論的にはこの両者の関心とその取り扱いに統合があるはずなのだが、現実にはそう簡単ではない。

(三) さて、このような流れの下に、今日の「教会カウンセリング」が、システム化され、実践されつつあるわけである。

著者は以下に、福音主義的立場から、教会カウンセリングの聖書的システムを提案することを試みたいと思う。

第一に、教会カウンセリングが、「教会」という職務全体の中で、どのように位置づけられるかを考えておきたい。R・ディックスによれば、教会職務には、①個人を取り扱う働きとしての教会配慮(Pastoral Care)と②そうでないもの、すなわち、宣教(Peaching)、教育(Education)、教会管理(Church Administration)および音楽(Music)とがある。そして、①の教会配慮は、「教会訪問(Pastoral Calling)と教会カウンセリング(Pastoral Counseling)とに分けられる。もっとも、この両者が、いつも別々になされるといっわけではないが、このような区分も一つの方法とすることはできる。いずれにしても教会カウンセリングは、牧師の多くの働きの中の一つの部分なのである。」<sup>⑥</sup>

ただし、教会カウンセリングも、厳密には、通常の教会の中で、どんな牧師でも実際に行なっている相談関係と、より専門的な仕方になされるものがあることも念頭におかねばならない。ただ教会が問題にするカウンセリングの問題点は基本的には共通している。

それでは、教会カウンセリングとは、いかに定義されるだろうか。著者は、福音主義的立場から、一つの試論として次の定義を提案してきた。「教会カウンセリングとは、神のことばと聖霊の指導の下に、教会者および同じ配慮をする立場の者が、信徒や求道者その他の人々が、広義あるいは狭義のなんらかの意味で信仰生活に関して持っている、いろいろな種類の問題を解決するにあたり、多少なりとも特別な仕方を持つ相談関係である。」<sup>⑦</sup>

以下若干の説明を加えていく。福音主義が、教会におけるカウンセリングの事実を否定することができないことは、すでに見たとおりである。しかし、それが聖書的であるためには、次の諸点において明確な神学と実践を持っていなければならない。

(1) 聖書を神のことばとして、カウンセリングの規範として中心的に位置づけ、かつ活用することである。なぜなら次のように記されているからである。「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のためには有益です」(IIテモテ三・一六)。このほか、使徒二〇・三三、ヘブル四・一二、詩篇一一九篇などもこの根拠である。

教会カウンセリングの全図的理解のため、この第一の点を次のように図式しておきたい。

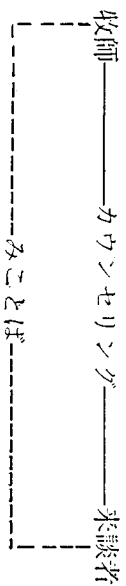


図 2

(2) 聖霊のガイダンスと啓発を意識的に尊重し、信仰をもってゆだねる態度のうちになされることである。このこと

によって、教会カウンセリングは、次のように構成されることになる。

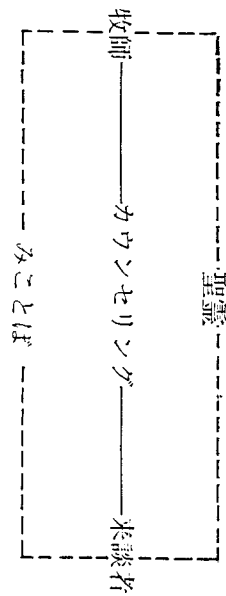


図 3

この点も極めて大事である。なぜなら、教会という聖務は、聖霊の御働きによって全うされるのだからである。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」(ヨハネ一四・二六)。この「助け主」は、RSVで「カウンセラー」であることは前述のとおりである。教会カウンセリングの奥義的要因はここにあるとも言うことができる。

(3) 教会者あるいは同じ配慮をする者によってなされるカウンセリングをさして、教会カウンセリングとする。それは、教会と教会の本来の使命と動機に基づいてなされる「奉仕」だからである。

従って、ここでは、カウンセラーとしての牧師あるいは同じ配慮をする者の人格的資質や能力などが考えられることになる。「パウロがテモテにさとしたことが、そのままではまるのである」。「……これらの務めに心を砕き、しっかりとやりなさい。……自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになりす」(一テモテ四・一二～一六)。

(4) 教会カウンセリングにも、内容と範疇がある。それは、広義(すなわち間接的)あるいは狭義(直接的)のなんらかの意味で、信仰生活に関する問題にかかわるものである。教会カウンセラーは、一般の心理療法家やカウンセラーと同じ内容のことをするのではない。それは、来談者が、キリストへと向い、キリストに根ざして生活できるようにすることであって、それを妨げる主観的客観的問題の解決にあたって、カウンセリングするものである、との範疇をここに列挙する余裕はないが、人格的にも、そのことを通して「キリストの形がなる」ように成長することを促す<sup>④</sup>。

(5) 多少なりとも、特別な仕方ではなされる相談関係がカウンセリングである。

教会カウンセリングを考えると、おそらく、この点が Secular と Sacred の葛藤を生じるところであろう。なぜなら、この特別な仕方とは、明らかに、現代心理学や精神病理学の理論と技法に負うことになるからである。すなわち、問題への洞察を処理のために必要な知識や技術、経験を持つことを含むためである。言うまでもなく、人間の問題は、いつも、人間の存在すべての面と領域にかかわる複雑なものである。

人間存在の次元のとらえ方は、いろいろある。心とからだの二元論、あるいは、心とからだと霊の三元論もある。フランクルのように独得な三元論を主張するものもある<sup>⑤</sup>。

しかし、ここでは経験的にも受け入れられている、一テサロニケ五・二三の三元論(この用語も必ずしも十分でないかも知れない)に従って問題の把握を次のように考えておきたい。

さて、教会カウンセリングにおいて、取り扱われる問題は、その比重の位層はともかくとして、いずれ、これら三



つの面にかかわっているわけであるが、教会カウンセラーの資格や技能によって、多少の相異はあっても、霊的側面に主眼が置かれていることに変わりはない。それ以外のときは、他の専門のカウンセラーに紹介して依頼することが職業倫理にかなう。

しかし、身体的病気はともかく、実際に霊的と心理的を区別することは、そう簡単ではない。こういう事実を考えると、専門的教育を受けた教会カウンセラーが必要であると同時に、牧師も、できるだけ多く、人間の心理に関する知識も学ぶことが大切だということになる。<sup>⑩</sup>

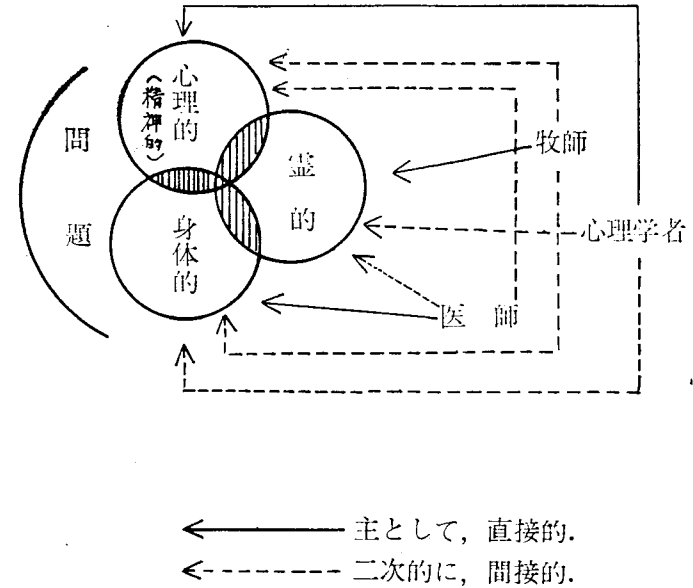
それでは、一般のカウンセリングの原理や技法を適用することは、なぜ問題になるのだろうか。教会が一般に考えるところはこうである。

第一はその学説の背景となっている思想が、非聖書的である。第二は、そのような非聖書的思想から生れた学説による方法は、聖書的なカウンセリングとは異質のものである。

確かに、この論は、全体としては正しいと言わなければならない。しかし、これだけの「概念」や「論」で、すべての学問的な発見やその現実的恩恵を拒否することができるかという点、そう簡単ではない。

マーレイは、次のように言う。「心理学者個人は、唯物論者であったり、機械論者であったり、あるいは、無神論者であるかもしれない。しかし、そのことは、ただ彼らの個人的見解や傾向を反映するに過ぎない。クリスチャンが電灯を使うとき、エジソンが熱心な信仰者であったか、あるいは、教会の会員であったか、どんな信仰的確信を持っていたかをまず考えてから……ということとはしない。そうだとすれば、なぜ、心理学的研究の価値ある諸事実を利用することをためらうのか。」<sup>⑪</sup>

この単純な論は、一つの事実を指摘していると思われる。しかし、これは、トウールナイゼンの次のことばで補足



(なお、この場合、心理学者、医師がクリスチャンかどうかで異なってくることもある。)

図 4

されるときに、より正当に取り入れられると言えよう。「教会において人間に呼びかけるといふことは、人間についての知識を前提とする。したがって教会は、心理学を、ひとつの補助学として必要とする。これは、人間の内的性質の研究に役立つのであり、またその研究についての知識を取りついでくれることができるのである。教会が、その際、批判的に区別しておかなければならないことは、心理学に付随し、教会本来の、聖書よりくみとられた人間理解を書するおそれのある、本質の異なる、世界観的前提である。」<sup>④</sup>

このように、こと人間の魂に直接関係することであるだけに、マーレイの「エジソンと電気」の論のように純粋に自然科学的なものの適用のようにには行かない点もある。トゥールナイゼンの指摘しているように、本質の異なる技法や目的結果が生まれてくる可能性があるからである。しかし、だからと言ってそのカウンセリングのすべてが無用なものではない。

それでは、先に述べた、一般カウンセリングの諸理論と技法について、どのように考えられるだろうかということになる。このこと自体、明らかに改めて論じられねばならない大きな課題であるが、二、三の点について考えてみたい。

① 教会カウンセラーと来談者の相談関係のあり方は、通常の場合現実にはほとんどと言ってよい程に「指示的」である。特に、福音主義の中ではそうであった。これは、「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れない……」(エペソ二・一四)や、神が立てられたメッセンジャーとしての牧師に「聞き従う」という体制から言うて当然のことであった。ところが、理由や原因はともかくとして、現実には、それだけで来談者の問題が、十分に解決されてはいなかったということが少なくないため、確信と喜びをもって力強く信仰生活するに至っていないということもある。<sup>⑤</sup>ここに考えなければならぬ「現実」があるのではないか。神のメッセンジャーは大部分「指示的」なものとして与えられている。墮落している人間に、神の啓示は、この方法以外では到達しなかったわけである。

しかし神のメッセンジャーに直面し、それによって生きようとする「人」の側は、極めて複雑な「反応」を起すわけである。このような状況の中で、悩み、苦しみ、迷っている者たちを導き、助けるところに、牧者の務めがあるのだから、たとえば、権威主義的な、単なる指示だけでは、十分でないことが多い。「良い羊飼は、自分の羊を知っている」「羊も自分の羊飼を知っている」という関係が大事になってくるわけである。その上での「指示的」カウンセリングこそ、その目的を果すと考えられる。この関係にあるために、次の方法の役割を認めざるを得ない。

② 非指示的カウンセリング、すなわち、クライエント中心法は、先に述べたように、クライエントも人間として内的に成長への志向と可能性を内在している、自己実現の「実存」を認めているところに立っている。

しかし、この場合、カウンセラーは、いかなる点からも診断や指示を試みるのではなく、クライエントの「内なるもの」が表現するための助けだけをするのである。カウンセラーは、自分の考えや何かを与えることは意図しない。(純粋にそのようなことができるかどうかはなお疑問であるが)。

このカウンセリング関係は、教会カウンセリングに、大きな貢献をするものがあることを認めねばならない。この「内なるもの」が何であるかは、ロジャースと教会カウンセリングでは異なる。先の図式のように、教会カウンセリングの主役は、目に見えざる聖霊(カウンセラー、助け主)である。ややもすれば、クライエントの「苦悩」の内情を真に理解しないで、「指示」に走りやすい立場にあるものに、非指示法は確かに「特別な仕方」でのカウンセリングを可能にするのである。教会カウンセリングにおける両者の沈黙は、真のカウンセラーが両者に働かれる「金」の時でもありうるのである。そして、特に、その個人が主につながれるようにするための豊富な体験の時となりうる。

③折衷的方法は、教会カウンセリングにおいても最も実際的方法である。聖霊は沈黙の時だけに働かれるわけではないし、立てられている指導者(牧会者)を通して教え、導かれるからである。時間や技術の面からも実際的である。

さて、このように考えるとき、カウンセリングにおける両者の関係のいずれも、それ自体で非聖書的であるということはない。問題は、その「関係」を支配する思想、目的にあることになる。従って、教会カウンセラーがその目的と思想において聖書に立ち、なお、一般カウンセリングの原理、方法と、その背景となっている人間観や治療観を正しく理解した上で、それらを適用あるいは修正するとき、なお無害有用なものとして用いることもできるものが少くないのである。

また、カウンセリングそのものが未完成のシステムである今日、特に、心理的取り扱いと、心理学說的取り扱いを全く同一視してしまうことなく、「限界と効用」を十分に考慮しなければならない。しかし「現実の人間」——神学的に言えば、罪の法則、肉の法則下にある人間、また、創造の秩序をとどめている人間——の姿を知り、理解するため、十分な根拠と実証性のある学説ほど傾聴し、学んで行かなければならないことになる。

なぜなら牧師の前にあるクライエントは、霊的な問題を、心理的あるいは身体的問題にすりかえて表現したりするし、また、この逆もありうるからである。<sup>④</sup> そのような心理的メカニズムや多面の相を持つ問題を適切に把握し、分析し、取り扱うために考えられる多くの可能性の中から、実際には仮説検証的慎重さと配慮の下に、カウンセリングの原理や方法を採用あるいは修正して行くことになる。

しかし、すでに見たように、教会カウンセリングのシステムは、単なる一般カウンセリングの応用上のものである。異質でさえある、それらを超えるものである。

ヒルトナーとコルストンは、教会カウンセリング独特の要素を調査した。総括的過ぎて抽象的な面もあるが、結びに引用しておきたいと思う。①教会という場と教会が象徴するすべてのもの。②相談に来る人がカウンセラーに期待する牧師としての役割、機能および信念。③説教者と会衆といった関係から、カウンセラーと来談者という関係への移行、ただしこの関係はカウンセリング終了と同時に牧師と教会員という元の関係へと帰ってゆく。④カウンセリングをおこなう場合の牧師としての目標と限界。<sup>⑤</sup>

以上の要約からも知られるように、教会カウンセリングは、あくまで、牧会者が、本来の使命達成のための奉仕の一部分——実際には非常に大きな、重要な部分——であるゆえ、牧会者であることを忘れては成立しないものである。

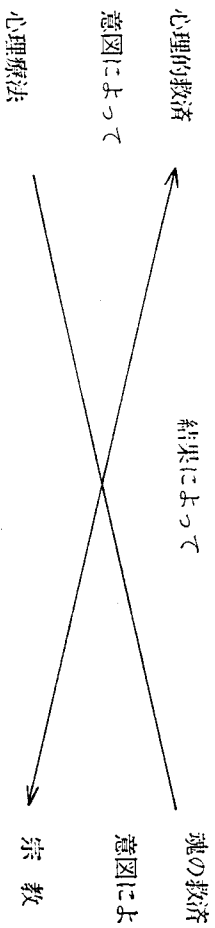
そして、みことばをその規範とし、またその実質的手段とし、聖霊のみわざに信頼しつつ、クライエントの問題の現実的諸面にも配慮しながら、可能なときには学問的原理や技法を適用しつつも、なお教会独特の動機と使命に基づいて、特別なセッションとして持たれる相談・助言の関係は、まさに、聖書において、主キリストご自身とその弟子たちによってその基礎を置かれ、模範を示して奨励されている「教会カウンセリング」であると言えるのである。

「わたしを愛するか……わたしの羊を飼いなさい。」この委託は決して安易なものではない、実に牧会者の主に對する愛として、全人格と生活を傾注して初めて、お答えできるものなのではないだろうか。

注

- ① A V (Authorized Version) R S V (Revised Standard Version) N A S B (New American Standard Version)  
 ② この項「新聖書大辞典」参照。

- ③ 要約は、主に『相談心理学』沢田慶輔編(朝倉書店)に従った。日本語では、もっとも正統的な本である。なお、本要約に出てくる原著書のうち、今日、日本でも、翻訳されて紹介されているものだけを上げておく。
- 。『ロージヤズ選書』(全七巻、岩崎書店)、ただし現在絶版、新たに、全集十八巻が企画、刊行が始まっている。
  - 。『カウンセリングの原理と方法』(F・P・ロビンソン・伊東訳、誠信書房・昭和三年)
  - 。『フロイド選集』(全十二巻、日本教文社、一九五二—一九五五)
  - 。『フランクル著作集』(全七巻、みすず書房、一九六一)
- なお、フランクルの実存分析とロゴセラピーについては、『フランクルの心理学』D・F・トウイデイ、武田訳(みくに書店・一九六五)という入門書がある。
- ④ Wayne E. Oates, *An Introduction to Pastoral Counseling*, ch. 1, 1959, Broadman
  - ⑤ P・オルセン『教会相談と精神療法』(赤星進訳、聖文舎、一九六六)二一—二二ページ。
  - ⑥ Oates; *Ibid.*
  - ⑦ 拙著『宗教意識および体験の形成と発展—特に意味づけを中心として—』(東北大学文学部心理学、修士学位論文、未公開一九六五)。
  - ⑧ Russell L. Dicks, *Principles and Practices of Pastoral Care*, ch. I & II, 1965, Prentice Hall.
  - ⑨ 拙著(抄録)「教会カウンセリングの福音主義的考察」『福音主義神学』一九七一。
  - ⑩ この点については、E.E. Thornton, *Theology and Pastoral Counseling* など、注目し値する方法で論述されている。彼によれば、教会カウンセリングは、「救済の道を備えること、悔い改めと信仰の道を備えること、ゆたなることへの道を備えること、信仰の共同体への道を備えること、学びと奉仕への道を備えること」である。
- また、フランクルは、心理療法と宗教の精神指導について、次のような、意図と結果の起り得ることを指摘している。(著作集5四五ページ)



- ⑪ フランクル、同上書。
- ⑫ Howard J. Clinebell, Jr. "The Challenge of the Specialty of Pastoral Counseling," *Pastoral Psychology* Vol. 15, No. 143, 1964, pp. 11の論題が詳論されている。
- ⑬ Alfred L. Murray, *Psychology for Christian Teachers*, 1956, Zondervan, p. 13.
- ⑭ トウルナイゼン・加藤訳『牧会学・慰めの対話』日基督教団出版局、二四九ページ。
- ⑮ 拙著「キリスト教的実存と一般的実存の差異とその欲求不満についての比較研究」、『教育・社会心理学研究』第七卷第二号、九三—一〇六ページ、でも論じているが、この調査によって、クリスチャンの多くは、たとえば世からの分離と世にある適応の問題に解決を持っていないことが明らかになっている。
- ⑯ 最近、これらの問題について、教会外の研究会や学会などでも正面から論じられている。主なものに、『治療心理学』フレイマ・シヨストロム、対島、岨中訳(昭和四四年)の第十五章、『カウンセリングの理論—カウンセリング論集2』伊東博訳編、IV宗教とカウンセリングなどがある。一読をすすめたい。
- ⑰ ポール・E・ジョンソン・武田訳『人間理解への道』第一章四五—五二ページ。  
(秋田ルーテル同胞聖書神学校校長、秋田ルーテル同胞教会牧師)